１１月３０日（日）主日礼拝レジュメ
「闇の中を歩んでいた民を照らす光」　イザヤ書９章１～５節

　ゼブルン・ナフタリそしてガリラヤは当時戦争によって他の国によって占領された地域だった。「シリヤ・エフライム戦争」におけるＢＣ７３４年のアッシリヤのティグラト・ピレセルの攻撃を受けて北のイスラエル王国が崩壊させられた。また、1 節に「異邦の民のガリラヤ」は、いわば都をはじめとする国の中央を守るためのいわば捨て駒とされた。ガリラヤの人々は決して顧みられることはなく、むしろ純潔を重んじるユダヤ人から異邦人のガリラヤと呼ばれて、蔑まれた。

しかし聖書は、それらの悲劇的な状況は、決してイスラエルが小国だったからではなく、そういう運命になっていたからでもなく、むしろイスラエルの民の神に対する反逆と罪が原因だと言う。そこには偶像礼拝の罪があった。預言者たちが、神に立ち返るようにと何度も悔い改めを迫っても、その声を無視して、神に帰ろうとはしなかった。その結果が、8 章 22 節「彼が地を見ると、見よ、苦難と暗闇、苦悩の闇、暗黒、追放された者」という状態であった。神なき世界は、まさに闇。そういう中でも大いなる希望が語られている。希望が語られているということは、自分たちの罪に気づかせ、神に反逆していた自分たちの過ちに気づかせようとしたのではないだろうか。自分自身のことに目を向けた時に見えてくるのが、それとはあまりにも対照的な神の存在であった。神様が反逆の民、罪深い民を見捨てることなく、あわれみ、愛してくださった結果としてこのような希望が与えられた。

この時代はまさに神なき時代と言っても過言ではないような世の中にあって、人々が絶望し、嘆き悲しみ、心の痛みを負っている。まさに、これから先、世界は、自分の人生は、この世はどうなるんだろうかと思える闇のような世界を歩んでいるように思えないだろうか。聖書は、私たちのこのような

世の中の状況は私たちの罪が原因であり、神に反逆し、神から離れてしまっていることが原因だと言う。しかし神はそのような人類を見捨てることなく、この地上にあっても希望の光を与えようとしている。それはひとり子イエスキリストをこの地上に遣わし、人々に罪からの救いを与えてくださったことに現れている。

２節「闇の中を歩んでいた民は 大きな光を見る」闇がどんなに深くても、闇は決して光を覆い隠すことはできない。むしろ闇が深ければ深いほど光はその輝きを増す。それと同じように世の闇が深ければ深いほど、神の救いの光がますますこの世にあって照り輝く。

イエスはガリラヤのナザレで過ごされました。ガリラヤは、国全体から見れば、見捨てられたような地、異邦人のガリラヤと呼ばれて、人々から蔑まれていた地だった。まさにそこで暮らす人々とともに、まさに蔑まれる者、低く貧しい者としてイエスは生きられた。まさに悲しい歴史を歩んだガリラヤとガリラヤの人々は、まさにイエスを通して大きな光を見ることとなった。

私たちも、闇のような世にあって、どのように歩んでいるのか。聖書に書かれてあるように、苦難と暗闇、苦悩の闇はないだろうか。イエスキリストは、私たちに罪からの救いを与え、闇ではなく光であられる神の光の中を神とともに歩む人生を与えてくださる。自分は誰からも顧みられていない、孤独だ、見捨てられたように感じるならば、イエス様はそのような者の友となり、ともに歩んでくださる。

そして神の光を受けた私たちはこの救いの光を罪の世に輝かせていきたい。